

佐賀県白石町における「豆祇園」の変遷 - 豆祇園に見る親子関係 -

白武 佳子

北九州大学文学部人間関係学科

要 旨

佐賀県白石町には「豆祇園」と呼ばれる子供だけで行う祭りがある。この祭りは昔から行われていたにもかかわらず、近年その形がとみに変わってきた。

その原因として「少子化の結果」また「伝統の消失」がまず考えられるのだが、本稿では、大人や共同体の子供との接し方の変化が原因と考え、祭りをを行う子供たちとその保護者との関係の変化から豆祇園を見ることにした。

調査方法は、すべてインタビューの形式をとり、ある部落の豆祇園における時間的流れと、1998年度の豆祇園に筆者が参加し、同年の他部落の豆祇園も調査することで、時間変化における比較の縦軸と、同年の複数部落の比較における横軸を明らかにした。

本調査の結果「豆祇園」の変化には子供と親、そしてそれを取り巻く地域の共同体の関わり方の変化が関わっていることが見えてきた。

そして、「豆祇園」はその時代の流れの中で、信仰の対象、子供の成長のシンボル、農民の数少ない娯楽の一つという存在から、地域と親子のふれあい、村おこしの為の方法の一つとして存在価値を変えてきた様子が見て取れる。

それは、ただ消えゆくだけでしかなかった農村の小さな「祭り」という立場から、ある目的を持った、イベントとしての存在価値を見いだされた「豆祇園」の姿なのである。

目 次

第一章 豆祇園について

第一節 豆祇園

第一項 豆祇園と祇園祭

第二項 豆祇園と地藏盆

第二節 その他の子供の祭り

第三節 豆祇園の基本的流れ

第四節 豆祇園以外の祭りと風習

第一項 大人の祭り

第二項 青年の祭り

第三項 青年の風習

第二章 一の籠部落における年代別豆祇園

第一節 祭りの形式

第二節 豆祇園の規模

第三節 出店

第四節 学年ごとの役割、特権

第五節 近年の豆祇園

第一項 役割分担

第二項 大人の役割

第六節 その他の変化

第三章 灯籠銭、賽銭の移り変わり

第四章 1998(平成10)年度豆祇園～一の籠～

はじめに

「祇園祭」という祭りがある。その「祇園」の名前を持ち、子供だけであげられる祭りが佐

賀県白石町にある。その祭りは「豆祇園」と呼ばれているにもかかわらず、多くの「祇園」で用いられる御輿や山車などを用いることはない。

「豆祇園」は部落ごとに子供達が寄り合って行われる祭りである。

佐賀県内には白石町以外でもその「豆祇園」が残っている町がある。また、白石町の中では64館の公民館単位のほとんどで、場所によっては公民館より細かく分けられた部落単位で行われている。

私の父も、また兄も祖父も経験している祭りで、古くからこの地域で行われているものであるが、最近とみにその形態が変わりつつあるという事が分かった。祭りをあげる小学生が減少し、男子のみで行われていた祭りに女子も加えるようになった。祭りの期間中、神社に宿泊する習慣がなくなり、祭りの中で学年ごとに細かく定められていた役割分担もなくなった。部落によっては祭り自体がなくなったところ、一度取りやめていたのを再開したところ、また、参拝客を集めるために案内状を配る、ビンゴゲームなどのレクリエーションを取り入れるところもある。このように変化する祭りの裏には、それをあげる子供たちの生活習慣や、大人や共同体の子供との接し方の変化が見て取れる。実際、近年の豆祇園は以前と比較して多くの場面で大人が祭りに関わるようになったのが分かる。元来ほとんどの行事を子供達だけが取り仕切っていた豆祇園に、どのようにして大人が介入するようになったのだろうか。

本稿では年代別に豆祇園経験者にインタビューし、1998年度の一の籠（いちのこもり）部落の豆祇園に参加し、同年行われた他の部落の豆祇園を見ることで、時代ごとに変化する豆祇園と子供と大人との関係を明らかにしたいと考える。

第1章 豆祇園について

第一節 豆祇園

豆祇園とは、先にも述べたように白石町の部落ごとに祭られている地蔵尊、水天宮、観音像などの小祠であげられる子供達の夏祭りである。しかし、「祭り」とは言うものの、現在多くの地域で行われているイベント化された「祭り」とは違い、「雑祭り」のような一般的には「行事」として行われている「祭り」に近いものである。たとえばこの白石町には部落の班ごとに集まってその年の収穫を祝う「餅祭り」という「祭り」があるが、これも、一般的に言う「祭り」とは違ったものである。つまりこの地方では、現代では「行事」と呼べるような事柄を「祭り」と呼ぶ風習があり、従って、本稿でも「豆祇園」を「祭り」と呼ぶことにする。

ところで、豆祇園の「豆」は植物の豆を指し、具体的には、大正または昭和中期まで、賽銭を供えたものへのお礼にしたのが「トン豆」すなわち空豆であったことからこう呼ばれるものだという。当時はどの家庭にもトン豆があり、モノのなかった時代、家庭から子供達に無理をせずあげられる物であったから豆が使われたのだろうと大正10年（1920年）代の豆祇園経験者は教えてくれた。かつては、「豆祇園」とは呼ばず、「地蔵さん祇園」といっていることが多かったという。

また、豆祇園についてまとめた資料がなかったためいつから始まったか、という細かなところまでは確認できなかったが、「郷土シリーズ4 佐賀の行事」には「肥前祇園に前後して、各地で子供の豆祇園が行われる。子供達が部落でまつる神や石祠等を被い清めしめ縄を張ってお祭りをを行い、はやし立てて、一般にお参りを勧め、参拝してお賽銭を供えたものにはお供え物

をやるなどする。お賽銭はあとで分配する。村の子供達の楽しみの1つ。前もって『とうりやあせん』といって祭りの費用を募って歩く。」(山口1957)という記述があり、また、文中にあった「肥前祇園」については、「夏祭り祇園の流れ。旧肥前藩時代は士気を鼓舞するために奨励された。」とある。このことと、大正2年生まれの人々の兄も豆祇園の経験があるという話もあったため、遅くとも明治には行われていたと考えられる。

第一項 豆祇園と祇園祭

豆祇園の起源を考えるために、まず「豆祇園」の名前の由来となった「祇園祭」と比べてみることにする。「祇園祭」とは八坂神社で行われる祭礼であり、古くは祇園御霊会と呼ばれ、貞観11年(869)に京の都をはじめ日本各地に疫病が流行したとき、「これは祇園牛頭天王の祟りである」として、平安京の神泉苑に、66本の鉾を立て、祇園の神をまつりさらに御輿を送って災厄の除去を祈ったことに始まるものである。同様の祇園祭は全国で行われており、九州では、博多祇園山傘、小倉祇園が有名である。しかし前述したとおり豆祇園では御輿や山車はもとより祇園祭と共通するものはなにも見られない。このことから夏に行われる祭りとして単に「祇園」の名前を流用したものと考えられる。

第二項 豆祇園と地蔵盆

次に、豆祇園では多くの部落がご神体として地蔵を祭っていること、また、大正時代には「地蔵さん祇園」と呼ばれていたことから「地蔵盆」との関係を見てみよう。地蔵盆とは「本来旧暦

7月24日に、一連の盆行事の終わりの行事として、主に関西地方で、地蔵を中心とした仏教行事として伝承されてきた」(管根1998)とあり、「畿内地方の地蔵盆では8月の23,24日に、普段は目立たない地蔵の祭られている小堂がこの日だけは灯明がともされ、多くの供物が供えられ、子供の参加により百万遍の数珠繰りや六斎念仏が営まれる」(管根1998)とある。そのほか、「佐賀歳時十二月」には「主役は男児で、各戸からそら豆などの豆類や金品をもらいうけ、参拝者には煮豆や菓子などを配る。参拝者の上げた賽銭は子供たちで分けあい、堂を飾るちょうちんは初盆を迎えた家などからもらいうけてきた。」(佛坂1979)とある。また、佐賀県山内町では「コンニャー(今夜)は、地蔵さんの灯籠かけチャーケン、茶ドン、豆ドン、油チャードンあげんさい」といいながら各戸を回り品物をもらいうけたり、佐賀県川副町では「アブラショウショウ アブラショウショウ」と叫んで、堂にかざす灯籠の油銭をもらいうけたりしていたという。(佛坂1979)これらは、同じ佐賀県の白石町における豆祇園と非常に似かよっており、豆祇園は祇園祭よりも地蔵盆の流れをひいていると思われる。

第二節 その他の子どもの祭り

「佐賀歳時十二月」によると、佐賀県伊万里市には観音さんの市、地蔵さんの市という祭りが行われるという。

この地方では祭りのことを「市」と呼び、「観音さんの市」は、現在では8月17日に主に女児によって催される。前出の「佐賀歳時十二月」には「夕方になると自分たちの住む地区内の観音像を人通りの多い路傍に運び出し、長机の上

に乗せて通行人に『観音さんの市ミャーラッシャイ(参ってください)』と呼びかける。昼間のうちに各戸を廻り金品をもらいうけ、ジャガイモダンゴを作る。線香、ローソク、花を買い受け、参拝者には団子を買ってもらうと共に、賽銭をあげてもらふ。こうして得た賽銭を皆で分け合う。(佛坂1979)とある。「地藏さんの市」も同様に、24日頃に催されるという。また、伊万里市大川内山では、18日に観音さまの市、21日に弘法大師さんの市、23日に清少公さんの市、25日に天神さんの市と催されるとあり、豆祇園においても同じ様に御神体によって祭りの日が決まっていたり、菓子売って賽銭と一緒に分ける部落もあることから、この「市」にも豆祇園との共通点が見られる。

第三節 豆祇園の基本形

それでは、豆祇園の大まかな形を述べていきたい。

祭りの時期は、ほとんどが夏休み中、或いは夏休みの数日前に行われる。基本的に部落ごとにその日時は決まっており、地藏尊は4のつく日、水天宮は7月26日、観音像は7月17日というように祭られている神社の御神体によって決められることが多い。まれに夏休み前に行われる場合は学校の日程に響かないように、時間が配慮されることがあるが、日を変えるところはあまり見られない。

次に時間経過に従って、祭りの大まかな流れを示す。祭り前日または数日前から灯籠銭と呼ばれる祭りの費用に当たるものを、子供達が部落の家一軒一軒を廻って集める。一軒あたり二百円から五百円ほどで部落によっては子供のいる家といない家とで差がつけられているところ

もある。また神社を掃除したり神社の草取り、飾り付けるための竹を切りに行き、神体に供えるお供え物を買ひに行く。お供え物の多くはスイカなどの果物である。そして祭り当日の午前中は、しめ縄や幕を張り、幟をたてたり、提灯をあげたりする。同時に、保護者が「ごっこさん」と呼ばれるご飯を盛り上げたものや、煮豆、酢の物などの準備をする。準備が終わると子供達は部落中を廻って参拝を勧める。午後になると参拝客がちらほらと来るようになる。賽銭を上げた人には、ごっこさん、煮豆、酢の物、準備しておいたお菓子などをわたす。それが夜まで続く。祭りが終わった翌日、賽銭の分配をしたあと片づけにはいる。その日、もしくは日を改めて「しまい祝い(打ち上げ)」をする。

調査した中で、江越(えごし)部落だけは子供達が「浮立(ふりゅう)」を奉納することで豆祇園をおこなうということだったが、それ以外のほとんどの部落がおおよそこのような順序、形式で祭りをを行う。

第四節 豆祇園以外の祭りと風習

豆祇園は基本的に子供を中心とした行事であったが、豆祇園の他にも、村の行事として大人の祭りと青年の祭り(図1)や風習がある。これらの祭は現在も残っているものもあるが、幾つかは昭和初期以降に消滅している。

まず、祭についてあげてみる。

第一項 大人の祭

大人の祭は二つある。1つは秋に行われる「おくんち」、すなわち「お供日」で

あり、もう一つは冬に行われる「地藏さん祭」である。「おくんち」では氏神である稲佐神社を祭る氏子の祭であった。この祭は210日、つまり9月初旬に行われていた祭りで、現在でも毎年10月19日に行われる。その年の豊作を感謝する祭であり、稲佐神社を氏神とする北有明(北明)村、南有明(南明)村、(現在では2村とも小学校区)では、甘酒を飲み、「煮じゃあ」と呼ばれる煮物と紅白の酢の物を食べる。「かけまい」という非常にゆっくりとした流鏝馬をし、御輿が出る。また、この日は小学校も午前中で授業が終わる。そして大人の祭りにはもう一つ、12月24日の地藏さん祭りがある。しかし、この祭りが現在残っているという部落は確認できなかった。1939年(昭和14年)生まれの男性の話では、大人の祭りであるため豆祇園と違い御神酒が出て、参拝に行くともらえるミカンが楽しみだったということだった。

この祭については、「一定地域の人々が参集し、地藏菩薩を賞賛する法会であり、地藏尊の前に置かれた灯明や供物を供えて供養する祭であった」(管根1998)という「地藏会」との関連も考えられる。

第二項 青年の祭

まず最初に、青年の祭に欠かせない「浮立」について述べておきたい。「『浮立』とは『風流』の当て字であり、中世の風流踊の脈を引くもの」(市場1988)とある。市場によると、佐賀県の民俗芸能の第一にあげられるのが浮立であり、佐賀では広く民俗芸能の総称として用いられるという。「風流踊」とは「宗教儀礼である踊り念仏が娯楽化し、念仏踊り(風流大念仏)へと変遷し、さらに風流化した結果、形成され

た民俗芸能と推定できる。」(門馬1998)とあることから「浮立」の起源が踊りであることが分かる。ちなみに白石町には、金浮立(かねぶりゅう)と呼ばれる子供芸能が残っており、これは鐘や太鼓を演奏する芸能である。1938年(昭和13年)生まれの方の話では、当時の北明村の浮立は、「おくんち」でも奉納されており、その神社までの道行きの際にお祝儀をたくさんもらうために大変な回り道をして「つきじえんもん(築切銭者)」と呼ばれ、嫌われていたという。これらから総合して、白石町、特に築切(つききり)で行われていた浮立は、楽器を演奏しながら道行きをする踊りであったことが想像できる。

さて、この青年の祭りは現在では行われていないが、1980年頃には私自身、参拝した覚えがある。「浮立」を奉納する夏祭りで、毎年7月25日に当時の青年団を中心として盛大に行われていた。祭りの行われる神社の神体は天神で、子供達が部落単位で祭りをあげるのに対して、それより一回り広い「字(あざ)」を単位にして行われていた祭りである。佛坂によると、前述した伊万里市では、小祠やお堂の祭りは子供たちによって執り行われたのに対し、各氏神の夜祭りは青年男子によって執り行われたとあることから、青年は子どもより広い範囲で祭りをあげていたのは白石町だけでないことがわかる。

第三項 青年の風習

次に青年の風習についてあげてみる。ここでは特に、青年期における風習をあげる。ちなみに、本稿で述べる「青年」とは、小学校(もしくは尋常小学校、高等小学校)卒業から結婚す

るまでの年代の男性を指す。さて、これら青年の集まる場所は「倶楽部」と呼ばれた。たいていは男性の集まる場所であったが、まれに女性も一緒に集まることもあったという。「倶楽部」は天神の隣にあり、前述した浮立の練習中、またはそれ以外の時期でも、民族学でいうところの「若者宿」のような役割を果たしていたようだ。「若者宿」とは「若者組や娘組の持つ集会所や宿泊施設」（倉石 1998）であるという。また、「若者組・娘組とは、成年に達した若者や娘達で組織する集まりで、若者組は村を基盤として組織され、祭の執行、村の警防、作物や休みの監視、共有林・共有漁場の管理、共同作業などの役割を担った。」（倉石 1998）とあり、青年には同様に、後述するような役割があったことから、「倶楽部」は一種の「若者宿」であったと見てよいだろう。

さて、このような倶楽部の他に、多くの青年が通っていたのは「寝宿かっとな（ねやかっとな）」である。これは老人だけの家や、大きな家、または金持ちの家などに用意された、2～3人の青年が寝泊まりするところである。寝宿かっとなを持つ青年は夕食を自宅で済ませると、寝宿かっとな仲間などと連れだって遊びに行ったり、酒を飲んだりしてからその家へ寝に行く。朝になると起き出して、また自宅へ帰るのである。これはいわば寝宿かっとなを提供する家の用心棒の役割を果たし、農繁期には寝宿かっとな加勢（がせ）といって田植えや稲刈りを手伝いに行くのが通例だった。

ところで、青年達が遊ぶのにも、酒を飲むのにも必要になるのがお金である。この時代、どの家も貧しく、現代のように小遣いをやる家などはなかった。そこで青年達は小遣いを稼ぐために「にゃーしゅー米（ごめ）」を精米所に売っ

ていた。この米は、自宅の米の刈り取りが終わったあと、その米を持ち帰る際にこっそりと車から降ろしたのものや、自宅の小屋から持ち出した米などであった。親はそれに気づいていたのだろうが気づかぬ振りをして、また、それを買い取る精米所の人も、その様子を見る近所の人も誰もとがめることはなく、「ああ、ちゃんもにゃーしゅー米ば持ってくごと（持ってこられるように）になったね」、「にゃーしゅー米ば、どっちよいでくごとなった（よっこいしょと持ち上げられるようになった）」などとひとつの成長の目安となっていたようだ。倉石は、若者組に加入する際に、「力石などを持ち上げられるなど力の有無も目安となった。一人前の仕事ができることによって、収益の分配も一人前に受ける権利が持てる。」と書いている。このことから「にゃーしゅー米」が「力石」の役割を果たしていたとも考えられる。

しかし、1929年（昭和4年）生まれの方によると、このような青年期に特別に許されていた風習は戦後にはなくなっていたという。多くの若者が出征したため、そのようなことをする若者がいなくなったからというのがひとつの原因であったという。

第二章 一の籠部落における年代別豆祇園

豆祇園について、昔はどういうことをしていたのか、現在の豆祇園の形態になるまでにどのように変わってきたのかを見るために1920（大正10）年代、1935（昭和10）年代、1950（昭和25）年代、1960（昭和35）年代、1965（昭和40）年代、1975（昭和50）年代、1980（昭和55）年代、の豆祇園経験者に、また1985（昭和6

0)年代についてはその経験者の父親に話を聞いた。

年代別の流れをわかりやすくするために一の籠部落で経験した人を中心にまとめるが、時代背景の参考になるような話は、他の部落の方の話も取り上げることとする。また、豆祇園についての基本的な質問については後の章で表にして(表1)分析しているの、ここではとくに、子供達の様子やそれを取り巻く人達の様子等、表に入れなかったことについて述べる。

第一節 祭の形式

まず、基本的な祭りの形式である。これはどの年代も変わりはないように見えた。前日まで灯籠銭を集め、当日祭りをし、翌日賽銭を分配し、しまい祝いをする。

しかし変わっていった事もある。例えば宿泊についてである。

これは、表1にもあるように1965(昭和40)年代までの人が経験している。それまでの年代の人はほとんどの人が祭り前日、または当日に宿泊した経験がある。場所は神社の屋根裏で、天井がないためそのために近所の家から戸板を借りてきて、それを神社の梁に渡して泊まっていた。また、泊まれるのは上級生だけであり、4年生以下の下級生は家に帰らなければならなかった。似た話は、八の割(はちのわり)部落の人の話にも出てきた。しかし、一の籠部落のように大きな神社を持つところは他になく、天井裏に泊まれるほどのスペースはなかった。そこで、神体の下にある狭い空間に、2~3人で無理矢理泊まったということだった。

また、1960(昭和35)年代の経験者の話では、昭和30年代くらいから宿泊はなくな

っていたという。宿泊について、学校から青少年の健全育成という点から中止するよう要請されたということだった。いずれにせよ同様の話は、1950(昭和25)年代の経験者の話にも出てきており、そのころには先生から宿泊はやめるようにと言われていたという。その結果、1975(昭和50)年代以降の経験者は神社での宿泊を経験していない。

第二節 豆祇園の規模

次に豆祇園に参加する部落について述べる。

前述したとおり、一の籠の秋吉神社は他の部落の神社に比べて大きい。参加する部落も以前は多く、1960(昭和40)年代経験者によると隣部落の二の籠(にのこもり)、沖小路(おきしゅうじ)部落も参加していたということだ。ここだけは「字」単位で子供達が集まっており、一の籠部落の子供達はそれら隣部落の豆祇園にも参加していた。

第三節 出店

1950年頃まで、他の部落ではほとんど来ない出店も一の籠の神社にだけは10軒程度出ていたそうだ。1920(大正10)年代経験者の話にはその出店の様子もあり、「のぞき」という紙芝居を見せるようなものが当時1~2銭で、非常に楽しみであったという。

また、出店についてはその場所代の話も出てきた。

1935(昭和10)年代経験者の話では、出店の場所代は「寺銭」といい青年達が取り立てていたという。前述したように青年達は自分で小遣いを稼ぐしかなく、その一環としてもら

っていたようで、その金で酒を飲んだりしていたということだった。しかし、1950（昭和25）年代経験者の話には青年達の話は出てこなかった。出店の場所代は自分たちで取っていたというのである。これは前述した青年達がいなくなったことに関係するのだろう。

出店は、1960（昭和35）年代経験者の話では、1055年頃から急に数が減ったという。それに関係するのか、寺銭についての話もその方からは出てこなかった。そして表1にもある通り、出店はその後一軒だけとなり、1994（平成6）年頃以降は、その出店を出していた店主の病気により、一軒も店が出なくなったという。

第四節 学年ごとの役割、特権

ところで、1970（昭和45）年代までの経験者の話に必ず出てきたのが、学年ごとの役割分担の話である。例えば少しふれたが、ある一定の年齢にならなければ宿泊することは許されない。このほかにも学年によって様々なことが決められていた。調査をした人によって参加学年がまちまちであるが、本稿では便宜上、1年生2年生（1950年経験者までは3年生4年生）を低学年とし、3年生4年生（1950年経験者までは5年生6年生）を中学年、5年生6年生（1950年経験者までは中学生）を高学年とする。そして、高学年の1番上の者は大将になる。大概は皆の話し合いで決め、年によって違うが、もし同じ学年に2人いる場合は2人大将になることもあった。このようにして大将を決めたあと、祭りの準備が始まる。

まず、前日までに集めなければならない豆と灯籠銭は中学年と高学年が、神社の掃除や草む

しりは全員です。また、一の籠の神社の場合、賽銭を上げた者にやるための札を作らなければならないが、これは低学年の仕事である。こうして前日までに準備をする。2晩泊まっていた1950年代までは、この夜から高学年が神社の屋根裏に泊まり込む。

祭り当日、幟たてや幕はりなどは親に手伝ってもらう。そしてお供え物などを購入した後、低学年は部落中を、時にはもっと遠くまで祭りを勧めて歩く。参拝客の相手は中学年の仕事である。高学年は年下の子供達に指示を与えながら屋根裏に上がり、お供え物を食べたり、雑談したりする。賽銭の額を見て、参拝客へのお礼の量などを上からこっそりと指示することもあった。暗くなると、提灯に火を入れる。提灯は神社のあるところから道に沿って立ててあり、その火の守をするのが低学年の役目であった。「ここからここまではおまえが見張れ」などといった指示は高学年から出される。こうして祭りをして、夜十時には皆で花火をあげて終了する。低学年や中学年の子供達はそこまでで家に帰り、上級生は神社に残る。

小さな子供達が帰ったあと、大将を中心とした高学年は集まった賽銭の割り振りを考える。上の学年から下の学年まで、それぞれに差額をつけていくらづつ分けるかを話し合う。祭りの翌日、もう一度皆が集まり、賽銭が分配される。この際、1950（昭和25）年代の経験者は、参加しなかった1、2年生の子供達に、賽銭の一部でノートと鉛筆を買い与えていた。

第五節 近年の豆祇園

第一項 役割分担

さて、ここまでは1965（昭和40）年頃までの話である。それよりも新しく豆祇園を経験した人たちは、学年ごとに役割を決めたりしなかったのだろうか。この世代の頃にも、大將らしき役割は存在したようだ。しかし1980（昭和55）年頃からは「大將」ではなく、「部落長」であった。部落長は、夏休みにはいる前に学校で行われる部落会議で選出され、部落における学級委員のような役割を果たしていた。

部落会議では夏休み中のラジオ体操はどうか、目標はどうか等を部落ごとに集まって話し合い、その中の議題に部落長の選出も入っている。

しかし、祭りの中において学年ごとに細かく役割を決めることはなく、どの学年も同じ役割分担である。ただし上の学年の者が下の学年の者の面倒を見るのはどの年代でも変わらないことである。

第二項 大人の役割

次に、豆祇園をする子供達のまわりの大人達について述べる。

豆祇園をするに当たって、どうしても必要になってくるのは親、または部落の大人の援助である。幟を立てる、幕を張る等は大人の力がなくてはならないし、ごっこさんを作る際や、灯笼銭と一緒にもらった豆を煎る際も、また「しまい祝い」の時も母親にたのんだ。しかし大人の手が単なる不足を補うためのものではなく、なっているのが近年の豆祇園である。特に1990年頃からは、親子で一緒に祭の作業をすることで親と子のつながりを持つという「親子のふれあい」が豆祇園の目的の1つになっているという。従って、幕、幟、ごっこさん

の準備はもちろんのこと、前日の神社の掃除は必ず参加する子供の保護者同伴である。祭りの間は日中は親同士で当番を決めて、時間が来ると交代で見回りをする。暗くなると電気を用意し、10時に終わるまで見張りをし、片づけも子供達と一緒にし、賽銭の分配も翌日に保護者がする。以前に比べて多くの場面で保護者が参加していることが分かる。

第六節 その他の変化

その他、学年ごとの役割分担の1つになっていた道ばたの提灯は、1975（昭和50）年頃から立てなくなっていたのではという話があった。この提灯は1950（昭和25）年くらいまで、豆祇園に参加する年齢になると、その子供の家から子供の名前を入れて神社に奉納していたものであり、子供の成長を祝い、願うシンボルの1つであった。1950年から1975年、つまり提灯を奉納しなくなって、かつ立てなくなるまでの期間はそれまでに奉納されてたまった提灯を立てていたという。また、参拝客に配るお札も、以前は近くの寺に水をもらいに行き碇で摺ったもので版を押していたのを、1990年頃からスタンプ台で打つようになったという。同年代から子供の数が減り女子も参加するようになり、1994年頃からほど前から夜だけの見習いということで、保育園の年長の子供も6時から8時くらいまで神社に座らせるようになっている。

参拝客は正確な人数はつかめないが、以前に比べてずいぶん減っており、特に4年前に最後の出店が出なくなってからは、参加している子供に関係のない人はほとんど来なくなっているそうだ。

このような「豆祇園離れ」は参拝者だけでなく、祭をしている子供本人にも見られる。1965（昭和40）年代経験者は、テレビなど他の楽しみが多くあり、豆祇園がそれほど楽しみではなかったという。豆祇園をする側にも、また参拝する側にも豆祇園に対して例えば成長の目安としての意味や娯楽性を見いだせなくなったことの現れだろう。

第三章 灯籠銭、賽銭の移り変わり

一の籠部落には毎年部落長が保管する灯籠銭、賽銭、その用途を書いたノートがある。現在あるノート以外の古いものの存在は確認できなかったが、昭和54年からの記録が残っている。

表にしてみると、灯籠銭、賽銭ともに大きな変化はない。徐々に額が上がっていくが、それでもどこかの年を境に大きく変わっているということもない。

しかし、参拝客が減っていく中で徐々に賽銭の総額は増えている。これについては、子供達の人数が減り、その家族が参拝した際に、どうせ子供もしくは孫の小遣いになるのだからと、昔に比べて多額の賽銭を上げる人が増えたからと考えられる。

賽銭、灯籠銭の用途についてみると、1983（昭和58）年までしまい祝い（打ち上げ）は大將（部落長）の家で行われていたのが、1984（昭和59）年から食事会といって外食するようになっている。またそのうちあげも1988（昭和63）年には金額も大きくなり、灯籠銭と、賽銭を分配した残りの額で足りなくなり、保護者が出した年もあったそうだ。また1990（平成2）年から1992（平成4）年まで神社の近所の家に幕を預かったりしても

らう礼として、神社に上がった御神酒などを寄付している。また同年に老人クラブへも前日の神社の草取りを一緒にしてもらった礼として酒を寄付している。そのほか平成2年から1994（平成6）年までPTAへも金を寄付している。

賽銭の分配について保護者に尋ねると、子供の人数に対して賽銭の額があまりに多い事があり、大きな額のお金を子供に持たせるのは心配でその分配は親がするようになったということだった。

打ち上げについても、年によってあまり変わりが無いように、親がその足りない代金を出すこともよくあることで、特に1996（平成8）年の打ち上げは子供の人数が多かったこともあり、全額保護者が出している。

ノートが作られる以前の賽銭や灯籠銭は正確な額は分からないが、豆祇園をする子供にとって、そこでもらえる分け前が大変楽しみだった。昭和中期までの豆祇園は親であっても子供に口出しをせず、子供に無理な準備を手伝うだけであつたという。

第4章 1998（平成10）年度豆祇園 ～一の籠～

7月26日。私は一の籠の豆祇園に参加した。

前々日に私の自宅へ子供達が灯籠銭を抜きに来たときに、参加したいことを伝え、部落長に話して参加させてもらえることになった。

今年の一の籠部落は男子10人、女子5人の計15人。

準備として灯籠銭を24日から集め、25日午前9時半から神社の掃除、草むしり、参拝客

へ渡すためのお菓子やお供え物の買だし、お札を作ったという。今年お札を作った正確な数は分からないが去年の余りもあわせて200枚程用意してあった。

神社の奥には本尊があり、その前にお供え物が並べられている。内容は、スイカ1個、梨3個、コップに入った御神酒、酒2升、蓮の花・実・巻き葉であった。スイカや梨は灯籠銭で買ってきたもので、酒2升は近所の家から供えられたものだった。その家の子供が昨年堀でおぼれた際に、神社のおかげで大事に至らなかったということであげられたものであるという。蓮の花・実・巻き葉は、部落内でれんこんを作っている農家の畑から譲り受けたものである。

さて、祭り当日、私が朝9時半に神社に来たときは、子供達はすでに神社に集まっていた。ラジオ体操が終わり、8時から幟立てや幕張、神社の中にござをしき、テーブルを並べるなどの準備を父親達と一緒にし、改めて9時に集合したということだった。

その後祭りについて何かをするわけでもなく、遊んでいる。神社の中は子供達が持ってきたおもちゃ、本、お菓子でいっぱい、子供達はそれに夢中である。男の子達は上級生が、年下でも仲の良い子はそれに混ざって一緒に野球をし、近くの堀に行き、釣りをする子もいる。そのほかの子供達は神社に残り、持ってきたゲーム、漫画、それに飽きると神社の棧に上れる事を競い合ったりして遊んでいる。女の子は、特に6年生の子はもう祭りなんかやりたくない、と話している。そのほかの3年生や2年生の子、特に1年生の子などは上の子と一緒に話をするのが楽しくて仕方がないという様子だった。

10時半になって一人目の参拝者が来た。この方は一の籠ではなく、隣の部落の寺の方だっ

た。この寺は、一の籠の豆祇園で参拝者に渡すお札を造る際にお水をもらいにいった寺である。70歳すぎくらいの方で、これまで一の籠の豆祇園にはお参りしたことがないが、ちょうどその様子が見えたのでお参りすることにしたということだった。

ここで、子供達は参拝者の相手をしなければならぬのだが、誰もしようとはしない。どう接すればいいのか分からず、そのまま遊び続ける子がほとんどである。結局6年生の女の子が相手をしたのだが、何をどうすればいいのか分からないという様子で、この時ちょうど「ごっこさん」も出来ておらず御神酒もそこにはおいていなかったため、お札と用意しておいたお菓子を渡してその場はおわった。

しばらくして、ごっこさんと御神酒とそれを注ぐための杯を例年通り、部落長の母親が持ってきた。その際子供達に、「ごっこさんと御神酒をあげてお菓子を渡したら『ありがとうございました』というのよ」というふうに参拝者へのお礼のあげ方を教えていた。このあと何人が参拝に来た。ほとんどの人が小さな孫を連れてお年寄り、そうでない人は、子供達の保護者で交代に見回りに来る人が、ついでお参りして行くだけであった。

12時になると、子供達は昼食をとるために帰宅する。この際も当番の保護者が来て、まずは4年生から6年生までの上級生が帰るように指示を出し、その子たちが戻ってきてから下級生が帰ることになった。

さて、これまでの間に子供達が祭りを勤めて歩く姿を見ていない。豆祇園では、子供達が大きな声で部落中を廻り、祭りへのお参りを勤めて歩くのが特徴の1つである。午前中にお参りしたお年寄りにも、「だーいも（誰も）おらん

で（叫んで）まわらんとねー」と子供達に訊ねる人がいたが、子供達は誰も廻らなかった。

1時をすぎた頃、皆が昼食を取り終わって神社に戻ってきた。それでも誰も廻る様子はない。祭りのことと余り関係ない様子で遊んでいる。

2時になると保護者が見回りに来て、祭りを勧めて歩くようにせかして、女の子達が渋々ながら行くことになった。しかし6年生の女の子は恥ずかしがって、どうしても行こうとはせず、1年生、2年生、3年生の子と、私の4人で行くことになった。小さな子たちは別にいやがることもなく、自転車に乗って、遊び半分の様子で叫んで部落を廻る。その台詞は「一の籠の秋吉神社ーにまいってくいござーい」で、これを繰り返しながら、部落中と、隣の部落まで勧めて廻った。

神社に戻ってしばらくして、80才位の男性のお年寄りが孫を連れてきた。小さな子供がいる家のお年寄りや、子供の神様を祭ってあるといわれている豆祇園にはよくお参りをする。その方がお参りを済ませ、3年生の男の子がお礼をあげようとする、そうではないと教えている。「お賽銭をいただいたときは、まず、御神酒をあげて、お札を二つ折りにして『ごっこさん』を包み込むようにして渡す、その後お菓子をやるのだ」ということを教えていた。前に保護者の方がお札のやり方を指導していたが、ごっこさんとお札の細かいやり方などは知らなかったのか、教えていなかったようである。その後も、数人のお年寄りが、小さな孫を連れてお参りに来た。

しばらくすると、見回りの保護者が来て、子供達を叱り始めた。遊ぶだけで豆祇園をしていないというのがその理由で、部落へ祭を勧めて歩くことや、人数の半分だけが神社に入り、部

落を廻ること交代することなどを手早く指示した。そのため、半ばせかしたような形で部落に勧めて廻ることになった。男の子はいやがり、再度女の子が行くことになった。今度は6年生の子共達も入れて、6人で行くことにした。

しかし、自転車に乗って部落中を廻っては見るものの、いっこうに声が出ない。年上が声を出さないせいか、その下の子たちも声を出さない。何もいわないまま、自転車に乗って廻っている。私が、どうして声を出さないのか訊ねると、恥ずかしいと言い、豆祇園もめんどくさいのでやりたくはないという。高学年の女の子にとっては、このような行事は恥ずかしいもの、という認識の方が大きいようである。

こうして神社に戻り、夕方までこれまでと同じように参拝客もまばらなまま5時半になった。それからまた夕食をとり、昼食と同じ要領でそれぞれ自宅へ帰った。

私が6時くらいに神社に戻ると、保育園の年長の子が2人見習として座っていた。2人とも何をするというわけでもなく、年上の子たちと遊べて楽しい様子だった。

8時になると、子供達の保護者が全員集まった。いす、テーブル、いす代わりのコンテナ、ライトなどを持ってきて広げている。そこでクーラーに入れたジュースを売り始めた。そうになると、どの子もジュースをほしがって自分の親に買ってもらい、雑談を交わすうち、気配のためか近所の人や数人お参りがてら集まってきた。9時すぎに皆で花火をあげて、片づけた。

片づけが終わると、部落長の母親が他の母親達と何か相談している。打ち上げについてのことらしい。例年は豆祇園の翌日にしていたが、仕事があるためその日は出来ない。いつか他の日にしようということだった。打ち合わせの後、

豆祇園は終了した。

第5章 部落別豆祇園

一の籠の他にも、豆祇園をしている部落は白石町内には数多くある。他の部落ではどのような豆祇園をしているのか、部落、または小学校校区によって違いがあるのではないかと考え、一の籠以外の6つの豆祇園を見てきた。調査したのは、須古(すこ)校区の喜佐木(きさき)部落、北明校区の西分(にしぶん)二号部落、二の籠部落、太原下(たいばるしも)部落、白石校区の福田北(ふくたきた)部落、六角(ろっかく)校区の東郷(ひがしごう)部落である。

その結果、全体的な印象として祭りの形式に関しては、喜佐木部落では保護者が豆祇園をしていること、福田北部落と東郷部落ではお菓子を販売していること以外はどの部落も同様のことをしていた。白石町には、小学校校区が4つに分けられているが、校区の違いもなかった。(表3)

では、表に入れなかった様子はどうか、祭りが行われた日順に部落ごとに述べていきたい。

1, 7月14日 須古校区 喜佐木部落

この部落は白石町内で一番子供の多い部落で、かつ、豆祇園に大変力を入れているといわれている部落である。

小学生の数は20~30人。中学生を入れると50人を越える。

ここでは一日中子供達が祭りにかかりきりになるということはない。そこで、この部落で祭

っている地蔵のすぐそばの、部落をあげて豆祇園に力を入れはじめた最初の役員であるという方のお話を伺うことにした。

この方は1928(昭和3)年生まれ。豆祇園の経験がある。その内容は、同じ年代の一の籠の豆祇園の様子とほぼ同じだった。80年前からこの部落で豆祇園がはじめられたと聞いたことがあるということだった。この部落も20年ほど前から、女子も混ぜて豆祇園をするようになったという。

その豆祇園に、この方が区長になってからは部落から助成金を出すことにした。白石町内では豆祇園に対して、部落から予算を出すかどうかは部落の役員次第である。何故助成金を出すことにしたのか、豆祇園に力を入れたいと考えたのか聞いたところ、子供達に思い出を作っただけでよかったからだという。このような田舎ではほとんどの子供達が町を出ていってしまう。その時に子供の頃の思い出を持ってほしいと考えたのだそうだ。その助成金は「ふれあい事業指定公民館」に指定された5年ほど前から出しており、現在でも1万円ほど出ているという。

豆祇園の様子について述べる。この部落は他の部落のようにお社がなく、地蔵が3体あるだけである。また、子供や親が祭当日に1日中かかりきりになることもなく、暗くなって8時からいからはじめる。お参りをすると、保護者の方が豆や茶などを出してくれる。道ばたには「ばんこ」と呼ばれる縁台がでて、集まってきた大人達はそこに座って談笑している。子供達はまわりで遊んでいるだけで、何もしないのか聞いたところ、前の週の日曜日に草取りと、竹取をし、灯籠銭を集め、前日の午後から少し準備をするだけだという。学校があるので、そう沢山のことにはさせられないとのことだった。また、

賽銭を分けることもなく、翌年の豆祇園の費用にするということで、他の部落とは違う豆祇園の様子だった。

2, 7月16日 北明校区 西分2号

この部落は私が見て回った豆祇園の中で、最もひっそりとしていたところである。

子供は8人で、しかし本当のこの部落の子供は4人だけだという。7月24日に豆祇園をする隣の班である西分1号の子供も4人だけなので、お互いに子供が手伝いあっているのだそう。

神社も特に小さく、参拝する人は1日で45人ほどと、あまりいないということだった。私がお参りをすると、子供の母親が横から「ほら、ごっこさんをやりなさい」等子供に指示をしている。そのごっこさんは塩がかけてあって辛かった。これまで塩のかかったごっこさんはいただいたことがなかったため、昔は塩をかける習慣があったのかどうか、祖母に聞いてみると、そのような風習は聞いたことがないという。おそらく母親自身も豆祇園について知らないことが多いのだろうということだった。

3, 7月21日 北明校区 二の籠

この部落は一の籠の隣部落で、神社の本尊も何であるか分かるところである。「おじゃあさん」と呼ばれ、この土地でかたに退治した弘法大師を祭ったものとされる。

参加している子供の数は6人。夜に行ったため子供達の保護者も一緒であった。私が行ったとき、ちょうど4人ほど勤めに廻っているらしく、留守番をしている子に話を聞く。その子は

女の子で、今日の豆祇園があまりに楽しみだったため、朝4時くらいから神社に来たという。また、もう一人の男の子は、今年隣町に引っ越して、正式にはこの部落の者ではなくなったが、夏休みということもあり、豆祇園に参加しているのだという。そのうち部落を廻ってきた子供達が帰ってきて、留守番を交代していた。

保護者の男性に話を聞くと、この部落もつい最近女子を入れるようになり、子供も減ってしまい、お参りに来る人も減ってしまった。しかし、いずれはこの祭りは男の子の祭りなのだから男の子だけに戻したい、男女平等という話もあるが、こればかりは伝統なのだから仕方がないという話をされた。また、この神社についての言い伝えも教えてくれると言う、私はもう知っていたのでお断りしたが、このように、大人達は知っていても子供達は神様のことを知っているのかどうかは疑問に思われた。

4, 7月24日 北明校区 太原下

この部落は、私が調査した中で唯一男子だけで祭りをあげているところである。参加している学年も、以前は小学生だけだったが、30年前に豆祇園自体が途絶え、15年前に復活したときに中学生も入れるようになったという。30年前に一旦途絶えたのは豆祇園の日に公民館で泊まったりしていたのが学校で問題になったためであるという。

男の子だけ、また中学生も混じっているせいか、子供達は威勢がいい。それについている保護者も全員父親で、今日の賽銭の目標額(4万円)にちゃんと届くまで部落を廻ってこい、等と発破をかけている。また保護者もかき氷を売ると張り切っていた。

他の部落の保護者が言うような、賽銭の分配が多すぎて大金を持たせたくないという話もなく、参拝に来る人が少なければ家を廻って賽銭をもらって来ることもあるということだった。

5、7月24日 白石校区 福田北

この部落は寺の中に祭っている地蔵があり、寺先を借りて豆祇園をしていた。小学校1年生から3年生くらいの学年しか今年はいなかったらしく、他の部落に比べて幼い。

8時近いこともあってか、子供とその母親で豆祇園をし、時折心配した寺の住職が様子を見に来ているようだった。

お参りを済ませると、母親が、煮豆、茶などを出してくれる。同じ場所で、女の子達が作ったという菓子を並べて売っている。クッキー、蒸しパン、ゼリー、ドーナツ、かき氷など、1つ30円、40円等で売っている。この売り上げも賽銭と一緒に子供達で分けるのだという。

しばらくして、住職が母親達にごっこさんを参拝者に渡したかどうか尋ねてきた。私はもらっておらず、ほかの参拝客にも渡しているようには見えなかった。すると母親達は「あれは客には見えなかった。すると母親達は「あれは客にはではなく地蔵に供えるものだと思っていた。」「そうか、ごっこさんと言うのか。」等と口々にいいながら持ってきた。しかし、どれくらいあげればいいのか、それも見当がつかないと言う様子だった。

何故そのように分からないのか訊ねると、豆祇園のほとんどを母親が取り仕切っているため、外から嫁に来た者には分からないということだった。

5、8月4日 六角校区 東郷

この部落も、前述した福田北部落と同じく寺の門前を借りた形で豆祇園を行っていた。何体かの地蔵が寺の門前に並び、これが豆祇園の本尊になる。豆祇園の幕は寺の門にはり、普段は寺に保存してもらう。

参加しているのは小学生から中学生までの15人。子供が減ったため今年から女子を自由参加にした。しかし、女子はほとんど参加しておらず、ここでも保護者が参拝者の相手をしているようだった。

また、駄菓子を並べて売っており、この売り上げと灯籠銭は皆で分配して、賽銭は寺に寄付するということがあった。

ここでは男の子が中心になって神社を勤めて回ったり、菓子を売ったりして、女の子は何もしないと言い、女の子は何をすればいいのか分からないので何もできないと言っていた。

第6章 分析～豆祇園における時間的变化～

豆祇園を軸として年代別、部落別に話をまとめてきたが、豆祇園の何が変わったのだろうか。子供の減少、それに伴う祭りの変化、伝統の消失、確かにそういったことが見えてきたようだ。

例えば変動はあるものの確実に減りつつある子供、それに伴って男子のみで行われてきた祭りが女子も一緒にするようになった。また、白石町の公民館長の話によると、祭がなくなった部落や、ピンゴゲームなどのレクリエーションを取り入れた部落、各戸に案内状を送って豆祇園を勤める部落もあるという。祭りに出る子供の名前を入れて提灯を奉納する習わしも廃れ、今ではその提灯もどこに保存しているのかわからないところもある。そのほか第4章、第5章

で見たように、豆祇園をサポートする大人自身も「ごっこさん」の作り方や、それ自体を知らないこともある。賽銭の用途も変わり、純粋に子供達だけで分配されることはなくなり、大人に管理されるようになった。また、豆祇園の間神社に泊まることもなくなった。

これらの変化の中心にあるのは単なる「少子化の結果」や「伝統の消失」ではなく、祭りをする子供とそのまわりの大人、保護者との関係にあると私は考える。つまり「子供」の領域であった豆祇園に大人達が介入し、なおかつ管理した結果が豆祇園を変化させたのである。

確かに豆祇園に関係する大人の存在は以前からあった。豆祇園の中における大人の役割については、1920（大正10）年代経験者の話にも出てきたことから分かる。ごっこさんの準備、幕を張るときや幟を立てるときの援助、しまい祝いの準備、もちろん灯笼銭や豆を抜くときにそれらを出してくれる人も大人であり、子供が豆祇園に上がる（参加しはじめる）ときに提灯を準備してくれるのも大人であった。

しかし、現在の豆祇園、特に1985（昭和60）年代以降の豆祇園は大人の出てくる場面が1920（大正10）年代のそれに比べると明らかに増えている。1920（大正10）年代参加者の話にあった役割はもちろん、豆祇園の前日の草取り、掃除、お供え物の準備、お菓子の準備、豆祇園の間中の見回り、夜の照明、また暗くなるとつききりで見守り、指示をし、賽銭の分配も全部大人がするようになった。

子供は何をするのかというと、親のいう通りに草取りをし、準備の手伝いをし、神社に座る。第5章にあったように喜佐木部落では保護者が祭をあげるため、子供達は前々日の準備の手伝いだけをする事になっている。1920（大

正10）年代から1960（昭和35）年代経験者のほとんどは、祭の準備の中にも楽しみを見いだしていたものである。1930（昭和10）年代経験者の話の中には豆祇園があまりにも楽しみで、一週間ほど前から神社に集まって草取りなど少しずつ準備をしていたという話があった。それほどまでに、以前の豆祇園は子供達の楽しみの1つだったのである。

また、保護者だけでなく、学校の存在も関係したと思われる。学校については豆祇園の際の宿泊の話にあった。今回調査した中で、豆祇園の泊まり込みは一の籠、太原下、八の割部落で聞くことが出来た。そのうち、一の籠でも30年ほど前から、また太原下でも同じ時期から宿泊がなくなっているのである。八の割については確認できなかったが、一の籠、太原下部落の話の中に、宿泊は学校から禁止されたという話が出てきた。一の籠の1950（昭和25）年代経験者の話では、この方が豆祇園に参加していたときから先生に怒られていたという話が出ている。それでも言うことを聞かずに宿泊していたということだったが、1955（昭和30）年頃以降には高校生、中学生の豆祇園中の素行が問題に上がり、青少年の育成に問題ありということで、学校からの宿泊中止の要請も厳しくなったという。それは、子供達に対する学校の存在が徐々に大きくなっていったことの現れでもあるのではないだろうか。

1940（昭和15）年代の小学校は田植え休暇があり、農繁期になると子供といえども一家の重要な働き手であったという。このころの「学校」は子供にとって現代ほど重要な位置を占めておらず、ほとんどの男子が小学校を卒業すると農業に従事する中では学校はそれほど必要とされなかった。しかし、戦後学校制度が改

正され、1960（昭和35）年をすぎて高度経済成長期にはいと多くの子供が高校にも進学するようになり、農業以外の職業に従事することも増えた。そうして子供達は一家の働き手の場からはずされ、保護される存在になったと考えられる。今では学校に配慮して豆祇園の準備を保護者が肩代わりする。そういったことから、学校も少なからず関係していたと言えるとは私は考える。 つぎに、大人と青年と子供の領域の消失について述べる。

1章に出てきた「寝宿かつとん」や「にゃーしゅーごめ」に代表されるような、ある年代に特別に許されること、この年代になれば出来ること、というようなことが1945（昭和20）年頃までは多く見られた。豆祇園の中においても学年ごとに役割があり、それをする事によってまわりの大人からその成長を認識してもらえることもあったという。つまり、「何か仕事が出来ると」ということで存在を承認され、それに見合うだけの特権が得られたのである。豆祇園においても、子供同士で上級生が指示を出して祭をあげていた。また祭の中には、大人、青年、子供のものがあり、それぞれのやり方であげていたことから、年代別の領域や権利がこの時代にははっきりと見えていたのではないだろうか。

しかしその変革期が、1940～1950（昭和15～25）年代と、1965～1975（昭和40～50）年代、1980～1985（昭和55～60）年代に見られる（表1、第2章）。というのは、戦争中に青年がいなくなったことによって青年の領域が消失し、経済成長の結果子供や大人に「祭」以外の娯楽が出来たり、子供が家業を手伝うことも少なくなった。それと同時に子供達は大人に「守られる存在」となり、

大人と子供の領域も消失していったと考えられるのではないだろうか。

つまり、現代の豆祇園の裏には年を経て豆祇園だけが楽しみであった時代から、そのほかに興味を持つものがたくさん出来た子供の姿と、豊かになるに連れ余裕が出て子供に目が届くようになった保護者の姿があり、その結果として豆祇園から離れていく子供達と、豆祇園に介入し、子供達を管理する保護者との、近年の豆祇園における関わり合いの様子が出てきたのだと私は考える。

結論

今回、1998年度の豆祇園を調査していく中で、これまでの伝統通りの男子のみであげていた豆祇園に戻したいという話を聞く一方で、親子のふれあいや、地域と子供の交流のきっかけとして豆祇園を行っているという話を豆祇園をする保護者の方から聞くことが出来た。また年代別に豆祇園についてのインタビューを重ねる中で、子どもにとっても、大人にとっても、豆祇園がそれだけでは存在する意味を持たなくなってきた様子が見えた。すなわち、1950（昭和25）年頃までは子供の成長の1つの到達点としての、また、娯楽の少ない農村における楽しみの1つ、そのほか純粋な信仰の対象としての豆祇園が存在し、その後徐々にその意味を無くしていくうちに1980（昭和55）年代以降では、豆祇園を通して村おこしをしたり、地域の交流、親子のふれあいを狙う、方法としての豆祇園になっていったのだと考えられる。

当初、豆祇園について調査をし始めた際は、ただ消えてゆくだけの祭であるという印象が強かったのだが、実際豆祇園に参加した人、現在

参加している人の話を聞いてみると、祭りをあげる子供の減少や、信仰心の薄れる中でも、豆祇園が形を変えながら続けられてきた様子が見えた。

そのことから確かに豆祇園の伝統はすたれ、豆祇園の存在価値が変わったり、なくなったりしているといえる。しかし、以前のような信仰の対象としての豆祇園の存在は見られることはないけれども、その目的が変わり、徐々にイベント化されていくのがこれからの豆祇園なのであり、その存在価値であるということが見えてくるのではないだろうか。

参考文献

『日本民俗宗教辞典』

地藏会・地藏盆	菅根幸裕
成人式	倉石あつ子
風流	大森恵子
東京堂出版	1998

『西日本民俗文化考説』市場直次郎 九州大学出版会 1988

『佐賀歳時十二月』 佛坂勝男 西日本新聞社 1979

『郷土シリーズ4 佐賀の行事』山口良和 佐賀県文化館

『白石町史』 白石町史編纂委員会 1974

参考資料

八坂神社ホームページ

「 祇 園 祭 」

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/yasaka/>

謝辞

本論文を書くに当たって、多くの方にご助言とご協力をいただきました。ここに一言お礼を述べたいと思います。

まず、北九州大学文学部助教授竹川大介先生にはこの論文の展開のアイディアの捻出から、このつたない文章の添削まで、多くのご苦勞をおかけしました。本当にありがとうございます。

また、同学部助教授重信幸彦先生、並びに佐賀大学農学部教授武田淳先生にも大変貴重なご助言をいただきました。

そしてなにより、突然押し掛けたにもかかわらず、大変親切にお話をしてくださった佐賀県白石町の公民館長様、白武留康先生、そのほか白石町の皆様に深く感謝しております。ありがとうございました。